

傾城恋飛脚

新口村の段

節季「節季候だいく、だいくは節季候、お目出たいは節季候」

女房「通らしやれく。親方衆と違ふてこちとらは水呑み百姓、こなた衆に遣る米はないはいの」

と、つこどに言はれ、

節季「こりや酷い。如何様、貰ふ節季候より、内の様子はせく候」

と、去ぬれば

女房は糸車、『正月までは休まそ』と、納戸へ取り込みお上の塵、掃き出す表へ

古手「テイ古手買ひ、紙屑。お内儀さん、紙屑はないかいな」

女房「才、嫌な人ぢやはいの。京や大坂と違ふて在所

に紙屑はないものぢや。勝手知らぬ人ぢやさうな。町方へ出て買はつしやれ。阿呆な人」

と笑はれて、

呟きながら見廻しく帰る程なく。

同行二人

「補陀落や、岸打つ波は三熊野の、那智の

おやまの詮議とは、人目にそれと白木綿、笈摺掛けた順礼姿。

八右「おかゝ様、火を二つ貸さつしやりませ。エ、こゝはなんといふ所かな」

女房「こゝは大和の新口村、煙草の火は出しませぬ。手の内も法度でござんす」

八右「ア、けんどんな在所だな」

と、家内をきよろく睨め廻し、次の村へと出でて行く。

女房「ほんに今日程胡散らしい者のたんと来る日はない。納戸這入りもなるまい。どりや、夕飯の拵へ」と竈の

（オクリ）前に差し掛かる。

落人の。ためかや今は冬枯れて、薄尾花はなけれど、世を忍ぶ身は後や先、人目を包む頬被り、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、労はる身さへ雪風に、凍える手先懷に、暖められつ暖めつ、石原道を足曳きの、大和はこゝぞ故郷の、新口村に着きけるが。

忠兵「コレ、こゝはわしが産まれ在所。四五町往けば実の親孫右衛門殿の所なれど、不通といひ継母なり。ことに今の身の上を、お目に掛けるは大きな不孝。この藁葺は忠三郎といふて、親達の家来も同然。まあくこゝへ」

と門の口。

忠兵「忠三殿内にか、ア、久しう逢ひませぬ」

とつゝと這入れば

女房は、

女房「アノこちのは今庄屋殿へ。どつからござんしてなんの用。わしや裁際の次郎兵衛後家の仲人で、近

と、知らねば遠慮もなかりけり。

二人は『ハツ』と胸に釘、打ち領いて、

忠兵「成程々々。大坂でもその評判、わしらは女夫連れで年籠りの参宮、懐かしさに寄りました。が、立ちながら逢ふて去にたい。コレ大坂者と言はずに、ちよつと呼んで来て下されぬか」

女房「オ、それは易い事。一返り往て来ませう。が、京のお寺が鎌田村の道場へお下り。先からすぐに参られたも知れまい。それでは余程わしが戻りも遅い。コレ女中さん、飯が仕掛けてある程に、出来損なはぬ様に、差しくべて下んせや」

と、襷外して出でて行く。

後は門口はたと閉め、掛金掛けてうつとりと、暫し詞もなかりしが。

梅川「コレ忠兵衛さん、ほんにこゝは剣の中。かうしてゐても大事ないかえ」

忠兵「ア、イヤ、男気な忠三郎、頼んで今夜はこゝに泊り、死ぬるとも故郷の土、産みの母の墓所、一緒に埋つまれそなたにも、嫁姑と引き合はせ、未来の対面させたい」

とおろく涙

梅川も、

梅川「それは嬉しうござんせう。さりながら、私ごとゝさんかゝさんは、京の六条数珠屋町。定めてこ

の間、詮議に合ふてゐさんせう。かゝさんは眩暈持ち、もしものことはあるまいかと、我が身の上より案じられ、今一度京の二親に、一目逢ふて死にとうござんす」

忠兵「オ、道理ぢやくや。わしもそなたの親達に、賀ぢやと言ふて逢ひもしたし。恩のある養子親、妙閑様や許嫁のおすはへも不埒の詫び。そなたの兄忠兵衛殿の志も無にした断り。今一度しみじみ逢ひたい」

と、人目なければ泣いぢやくり、

梅川「わたしもたんと恩のある、兄さんが猶恋しい」と、互ひに手を取り抱き合ひ、涙の霰はらくと、袖に余りて窓を打つ。

忠兵「ハア、雪が降るそうな」

と、奥の間は西受けの、反古障子を細目に開け、身遣る野風の畑道、後ろしぶきの吹雪には、担げて急ぐ阿弥陀傘、道場参りぞ続きける。

忠兵「アレく、ありや皆在所の知つた衆。先なは樋

の口の水右衛門、マ酷い呑み手ぢやぞい。その次は荷持ち瘤の伝が婆、こりやまた村一番の茶飲みぢや。

ア、それ、そこへ来る置頭巾は大貧乏であつたが、年貢に詰まつて娘を京の島原へ売つて、よい客に請け出され、金持ちの奥様に成つて簪の蔭で田も五町、蔵も二箇所、の俄分限。ア、同じ女郎を請け出しても、わしはそなたの親達に憂き目を掛けるが、口惜しいはいの」

梅川「エ、愚痴な、もうくそんなこと言ふて下さんすな、言ふて下さんすな」

忠兵「ア、アレ、あの親仁は弦掛けの藤治兵衛。八十八で一升の飯を残さぬ達者者。今年、ア、丁度錢百ぢや。その後、子細らしい坊主は鍼立ての道庵。あいつが鍼で母者人を立て殺した。思へば

く親の敵」

梅川「ア、もうよいはいな。今腹立てたてゝなんの役に立たぬこと」

忠兵「あれく、あそこへ見えるが親仁様。この世の

別れお暇乞ひ、せめて余所ながらお顔なりと拝まうと、遙々とこゝまで来た念願が叶ふたか。ア、有難いく」

梅川「エ、エ、ヒエ、あの緞子の肩衣が孫右衛門さんかいな。ほんに親子は争はれぬ。目元なら鼻筋なら、お前によく似たことはいな」

忠兵「サア、それ程よう似た親と子が、詞さへも得交さぬは、なんとした身の因果。ア、お年も寄り足元も弱つた。これが今生のお暇乞ひでござります」

と、手を合はすれば

梅川は、

梅川「今がお顔の見始めの見納め。これ申し、私は嫁でござんする。夫婦は今も知れぬ命、百年の御寿命過ぎて後、未来で孝行致しましよ」

と、口の内にて独り言、

夫婦諸共手を合はせ、とかう涙に咽びゐる。

孫右衛門は老足の、休みく門を過ぎ。

野口の溝の薄氷、滑るを止まる高足駄、鼻緒は切れて横

様にどうと転べば

『南無三』と、忠兵衛藻掻けど出られぬ身、

梅川慌て走り出で、抱き起こしつ裾絞り、

梅「申し、どこも痛みは致しませぬかえ。お年寄りの危ないこと、オ、マ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒も上げて上げませう。マアくこちへ」

と手を引いて、内へ伴ひ上がり口、腰膝撫でて労れ

ば。

孫右衛門は気の毒さ、

孫右「ア、戴きます。どなたか知らぬが、忝い。

お蔭で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のお優しい。年寄りと思し召して嫁子もならぬご介抱、もうく手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。幸ひ庭に藁は沢山、鼻緒はわしが上げます」

と、懐探して取り出す塵紙、

梅「ア、申し、ここに良い紙がござんす。紙繕ひ捻つて上げましよ」

と、延べ紙引き裂くその手元、

不思議そうに打ち守り、

孫右「こゝら辺りに見慣れぬ女中、マアこなさんはどなたなればこの様に、懇ろにして下さります」

と顔つれづれと眺むれば

梅川いとど胸つぼらしく、

梅「ハイ、私は、旅の者。私の舅の親仁様、丁度お前の年延で格好も生き写し。外の人にする奉公と

は、さらく、以て存じませぬ。お年寄つた舅御の臥し悩みの抱き抱え、孝行は嫁の役、御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひは飛び立つ、サア、飛び立つ様にござりませう。が、その紙とこの紙と替へて私が申し請け、連合ひの肌につけさせて、て、御に似た親仁様の形見にさせとうござんす」

と、塵紙袖に押し包む、涙にそれとは知られけり。

詞の端に孫右衛門、『さてはそうか』と恩愛の、尽きぬ涙を押し隠し、

孫右「ムウ、こなたの舅にこの親仁が似たといふての

孝行か。エ、嬉しいござる、が、腹が立ちますはい。

わしも年長けた倅めを、様子あつて久離切り大坂へ養子に遣つたが、傾城といふ魔がさして、人の金を

盗んだとやら、挙げ句に所を走つた噂。この大和は生国なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隠し目付け、或ひは順礼古手買ひ、節季候にまで身を窶し、この在所はもうく詮議最中。誰故なれば、その傾城の嫁御故。もう近頃愚痴なことなれど、世の譬へにも言ふ通り、盗みする子は憎のうて、縄掛ける

人が恨めしいとはこのこと。久離切つた親子なれば、よからうが悪かろうが、構はぬこととは思へども、大坂へ養子に往て、利発で器用で身を以て身代もよう

仕上げた。あの様な子を勘当した親は大きな戯け者と、指差ししられ笑はれたら、エ、マ、その嬉しさはどうあらう。今にもつひ探し出され、縄掛かつて引かるゝ時、『孫右衛門は目水晶、よう勘当した出かした』と、誉められるのがおりや悲しい、誉められるのが悲しうござるはい。ア、それを思へば一日も、早

う往生お救ひと、拝み願ふは今参る如来様御開山。

コレ、マ仏に嘘が吐かれうか」

と、どうどひれ伏し悶え泣き、

梅川も声を上げ、

忠兵衛は障子より手先を出だし伏し拝み、身を揉み嘆くぞ道理なる。

猶も涙を押し拭ひ、

孫右「様子聞いたか聞かぬか知らぬが、子を釣り出さうとお上の計らひ。養ひ親の妙閑殿、一昨日牢へ入れられたげな」

梅「エ、」

孫右「サ、それでつくづく思ふには、実の親を頼りにして、もしも忍んで来はせまいか、来たらばなんぼう不憫でも、養子親への義理あれば、匿ふことはさて置いて、親が縄掛け出さねばならぬ。ア、どうぞ来てくれねばよいが、こゝら辺りを舞ひく、舞ひ付きははせまいかと、四年以来逢ひもせず、懐かしい子の顔を見ぬ様にくと、雑行ながら神叩きも、不

憫さからおぢやるはい、不憫さからおぢやるはいの。ア、とは言ふものゝ若死にするも人の一生。義理ある親を牢へ入れ、おめくくと逃げ隠れは、末世末代不孝の悪名。所詮通れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行。サ、サ、覚悟極めて名乗つて出い、覚悟極めて名乗つて出おれ。ア、今ぢやない、今ぢやないく、今のことではないはいや。したが、それもどうぞ親の目に掛からぬ所で縛掛かつてくれ、ヨ。エ、現在血を分けた子に、早う死ねと教えるも浮世の義理か、是非もなや。なぜ前方に内証で、かうくした傾城にかうした訳で金が必要と便宜でもしをつたら、久離切つても親子ぢやもの、隠居の田地を売り立てゝも首縄は掛けまいに。皆あいつが心から、その身も狭い苦をすて、いとしばなげに嫁御にまで、思ひも寄らぬ憂き目を見せ、知音近付き親にまで、隠れる様に身を持ちなし、碌な死もせぬ様に、この親は産み付けぬ。エ、憎い奴ぢや、憎い奴ぢや、憎い奴ぢやと思へども可愛うござ

孫右「ア、コレ益体もないく、益体もない。たつた今も言ふ通り、たとへ詞は交さいでも、顔見合はしたりや縄掛けるか、俺が口から訴人せにや養ひ親への義理が立たぬ。なんぼ義理が立てたいとて、親の手づからどう縄が掛けられうぞ、どう縄が掛けられうぞいの」

梅川「御尤もでござります。そんなら顔を見ぬ様に」と、傍に有り合ふ手拭ひ取り、泣くく後ろに立ち廻り、

梅川「慮外ながら」

とめぬない千鳥

梅川「御不自由にはあらうが、かうさへすれば、傍にござつても構ひはあるまい」

孫右「オ、忝うござる。物言はずと顔見ずと、手先へなと触つたら、それが本望逢ふた心、親子一世の暇乞ひ。が、コレ必ずこなたの連合ひに、もの言はして下さるな」

と、悦ぶ内に忠兵衛は、嬉しさ余り駆け出でて、

る」

と、泣き沈み、分けたる血筋ぞ哀れる。涙の隙に巾着より、金二包み取り出だし、

孫右「これは京の御本寺様へ上げうと思ふた金なれど、嫁と思ふて遣るではない、只今のお礼のため。これを路銀にちつとなど、遠い所へ往て下され」

と、渡せば

梅川押し戴き、

梅川「お心付いたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を立ち退いても、私が姿目に立てば、借駕籠に日を送り奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし二十日余りに四十両、遣ひ果たして二歩残る。金故大事の忠兵衛さん、科人にしたも私から。さぞ憎からう、御腹も立たうが、因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進めて下さんせ」

と、奥の障子を開くるを

引き止め、

親子手に手を取り交はせど、互ひに親とも我が子とも、言はず言はれぬ世の義理は、涙湧き出る水上と、身も浮くばかり泣き託つ。

折から聞こゆる多くの人音、

二人を奥へと突き遣り突き遣り、

孫右「ア、これく女中、あの物音は慥かに捕手。この裏道の小川を渡り、藪を抜ければ御所街道。サ、早うく」

と氣を揉むところへ。

順礼姿の八右衛門、

利平も共に蚤取り眼、

役人大勢打ち連れ立ち、

八右「この内が氣ぶさいな」

と、どかくくくくと込み入るところへ

組子一人駆け来たり、

捕手「所は長谷の山続きに梅川忠兵衛と名乗る者、休みをつたを追つ取り巻き、絡め捕らんと致せども、なかく手に合ひ申さず」

と、聞くより小頭こがしら

小頭「さてこそく、来たれ、続け」
と引つ返せば、

二人も共に飛んで行く。

孫右衛門は飛び立つ嬉しき、『天の助けかかたしけな 忝かたじけない』
と、裏道見遣つて伸び上がり、

孫右「オ、そうぢやくその道ぢやぞ。ア、ソレその

藪をくぐるなら、切り株で足ツゝゝ突くな」

と、届かぬ声も子を思ふ、

平沙の善知鳥血うとの涙、長き親子の別れには、安方やすかたならで
安き気も、涙、涙の、浮世なり

【2026. 1. 15】